キャリア・デブロプメントと人との交流

谷　光　太　郎

目　次

㈠　はじめに
㈡　キャリア概略
㈢　キャリア（Ⅰ）　（中堅時代）
㈣　キャリア（Ⅱ）　（重役時代）
㈤　キャリア（Ⅲ）　（好奇心）
㈥　キャリア（Ⅳ）　（入獄）
㈦　交流　（人の真価）
㈧　おわりに

㈠　はじめに

江戸期の武士の学問は，「経」，「史」，「子」，「集」のいわゆる「四部の学」であった。

「経」とは，「我ら如何にあるべきか」という生活の原理に関する学問である。これに対して，「我ら人間が（過去に）如何にありしか。かくありしが故に，我らはかくあらざる可からず」というように，歴史を鑑として人間のあり方を考えるのが「史」である。

日々の日常で我々を動かすのもは，人間如何に生きるべきかの原理や，生活習慣であるが，人間の心を強く揺り動かすものは感情であり，この感情がリファインされたものが情操である。情操を養い，練るものは詩文であり，この詩文の集録が「集」である。

いかに「経」や「史」を解したか，即ちその人の生活原理や実践の工夫を，

情操を通じて現わしたものが詩文であり，それを集めたものが「集」である。

「子」とは，人生に独特の観察と感化力を持つ秀れた人物の著作である。[1)]

人間が本来持っている徳性，理性により反省が行なわれ，これによって何をなすべきかの判断，決定の基礎となるのが「義」であり，単なる欲望の満足を求めるのが「利」である。[2)]義と利を弁別しての判断力，判別能力を見識とか識見という。

見識は単なる知識とは異なる。知識は頭の機械的働らきで，本を読んだり講義を開いたり何かすれば，特別に頭が悪くない限りいくらでも修得できる。しかし，見識や識見は理想を持ち，現実の色々な矛盾や抵抗を経験し，物理的，心理的，社会的に貴重な体験を経て，生きた学問をしなければ養うことはできない。[3)]

武士の世界では「知識」の多寡は問題にされなかった。むしろ雑駁な知識は嫌悪された。

「経」「史」「子」「集」を読み，現実の体験から得た人生の原理と理想を実践で深めた判断力である「見識」が求められた。判断は行為に至らねばならない。理想を求めての現実の行為は容易なものではない。必ず反対，抵抗，妨害がある。

現実への具体的対処には勇気，すなわち胆力がいる。現実の様々な矛盾や悩みに屈することのない実行力・決断力を持つに至る時に見識は胆識となる。[4)]「見識」は「胆識」に到らねばならない。

もちろん，安易，平穏のみを求め，難しい事は先送りにして何とか過し，ただひたすら身の安泰を図ろうとした侍もいた。彼等は，「世の中は左様，然

第一章

1）「経」，「史」，「子」，「集」については「人物を創る」安岡正篤，プレジデント社，1988年，pp. 227-228

2）「朝の論語」安岡正篤，明徳出版，1980年，p.93

3）ibid.，p.94

4）ibid.，p.94

らばごもっとも，その儀につきて然(しか)と存ぜぬ」を処世訓とした。

しかし，いつの世にも，どのような社会でも，これではどうにもならぬ時が必ずくる。

幕末時がそうであったし，第二次大戦での敗戦時もそうであった。いろいろな面で日本が世界の最先端となり，お手本のなくなってきた現在もそうそうであろう。

人間の基本的価値は「気」，すなわち気力，気魄である。実業界等でひとかどの仕事をした人は，いずれも気力溢れる人々である。「気」の根元，大本を「元気」という。気力，気迫がなければ，この世に無目的に漂う，退屈な時を過ごすだけの生物に過ぎなくなる。気力がないと，いくら理想や教養があっても単なる観念や感傷，気分といったものになり，人生の傍観主義，逃避主義，妥協主義になってしまう。[5)]

人間，気力が横溢してくれば，必ず理想すなわち「志」が生じ，「志気」が溢れてくる。志は，お客がたまにやって来て，去るような一時の「客気」となってはならぬ。また，志は固く維持・持続する，すなわち「操」(永続性)が必要であり，竹の節のように時々固めてゆかねばならぬ。散漫にならぬよう統一性を保たねばならぬ。これを「志操」とか，「志節」という。[6)]

「見識」と「胆識」があり，目先の目標だけでなく，将来への大きな「志」を持ち，しかも「志操」「志節」の感じられる人を「器」の大きな人，すなわち「器量人」という。「器識」という言葉もある。

これらの人々は大きな理想があるから，小さな事で怒ったり，舞い上ったり，意気消沈したりすることはない。人生の色々な悩み苦しみをも受け入れて，ゆったりと処理して行ける。[7)]

幕末から明治にかけて，外国人からも高く評価されるような人物が雲の如く輩出した。

5）ibid.,　p.92

6）ibid.,　pp.92-93

7）ibid.,　p.95

人間如何に生きるべきかを学問や修業の最終目的とした教育思想の成果である。

20歳台で堂々の風格と見識を示した橋本左内，吉田松陰といった人物を産んだ。

明治後期から教育思想が変った。西欧列強に追いつくための「知識」修得が教育の目的となった。雑駁な知識の詰込教育から，人物の払底が極端に目立つようになった。

「論理的知識を駆使して長々と書きしるされた論文、論説などは専門家の知識、技術の研究には役立つけれども，人生の案内にはならない。人生の幾山河を超える力にはならない」のである。[8)]

「気力」の根源は「体力」「骨力」にある。体力・骨力を錬る運動や武道は大いに奨めたい。日常生活において気力を溢れさせてくれるものは,「経」「史」「子」「集」に関して座右の愛読書を持ち，日常身辺近くに私淑する人物を持つことである。歴史上の人物でもよい。自分に共鳴できる優れた一個の人格を通じて成された「集」を学んだり，私淑する人物の研究も勧めたい。

プラグマティズムの開祖といわれるウイリアム・ジェイムズの言葉に次のようなものがある。[9)]

「人間は青年時代に（いくつになっても同じだが）心の中には，はっきりした，正しい理想像，即ち私淑する人物を持って，この理想に向かってたえず努力する，そこに到達するように努力する，ということが青年の運命を決する問題だ」

ジェイムズを引用するまでもなく，これは古来より識者がいってきたことである。

歴代総理の指南役を以て任じ，財界経営者にも信奉者が多かった安岡正篤も次のようにいっている。[10)]

8）「活眼・活学」安岡正篤，PHP研究所，1985年，p.147

9）「運命を開く」安岡正篤，プレジデント社，1986年，p.175

10）ibid.，pp.175-176

「人間はできるだけ早いうにちに，できるだけ若い間に，自分の心に理想の情熱を喚起するような人物を持たない，理想像を持たない，私淑する人物を持たないのと，持つのとでは，大きな違いです。なるべく若い時期に，この理想精神の洗礼を受け，心の情熱を燃やしたことは，たとえ途中いかなる悲運に際会しても，いかなる困難に出会っても，必ず偉大な救いの力となる。若い時にそういう経験を持たなかった者は，いつまでたっても日蔭の草のようなもので，本当の意味において自己を伸ばすことができない。ことに不運のときに，失意のときに，失敗のときに，この功徳が大きいものです」

筆者の学生時代，民法の広中俊雄先生よりペルゼーンリヒカイト(Persönlichkeit)と排し，ザハリヒカイト(Sachlichkeit)に至るのが学問の近代化，科学化である—と教えられたが，象牙の塔の法学の世界ではそうであるとしても，実業界はそうではない。一万人の音楽家の力を結集してもベートーベン一人の音楽に劣るとか，百人の画工の画技を集めても雪舟の一筆に及ばない，といった芸術の世界ほどではないが，結局は人に尽きるのである。組織，戦略，予算，人員数，バランスシート，キャッシュフローといったもので事業の成否が決るものでは決してない。

人間ないし人間関係を捨象したものだけで経営や企業の真実を捕捉できるものではないし，文献と傍観的立場だけでいかに精緻な分析を行っても，「経営」の実態の本質に迫ることはできない。

従来，人生の行き方として，名の通った学校を卒業して，一流大企業や中央官庁に就職すれば，後は定年まで安逸な生活を享受し得る，安楽な家庭生活を営める，定年後は退職金で余生を楽しめる，といった考えがあった。

これらの考えの前提にあった，右肩上り経済，学歴重視，温情的年功序列，といったことは既に崩壊しつつある。

大樹の陰で安逸の惰眠をむさぼろうとする人々は，遠慮なく40歳台からリストラの対象になっている。

こういう時代に何よりも必要なことは，なるべく早い時期から自分のキャリアとそのデベロプメントの方向とを考え，これらの実践に励んでおくこと

だ。キャリア・パターン，キャリア・デブロプメントのためには，私淑する古人の生き方を探ることを奨めたい。[11)]

筆者はかって，キャリア・デブロプメントの考察の一助として，森鷗外，柳田国男，南方態楠のケースをあげてみた。(「キャリア・デザインと三つのケース」山口経済学雑誌，平成9年7月号)

三人の活躍時期は明治後期，大正，昭和初期である。日本史上から見ると人材払底の時代である。

時代を遡って，数多くの人材が輩出した幕末前期の人材に焦点をあて，彼等のキャリアから学ぶべき点を探ろうとするのが本論文の目的である。幕末前期の代表的思想家として，「日本思想大系（岩波書店)」シリーズのNo.55では，渡辺崋山，高野長英，佐久間象山，横井小楠，橋本左内の五人が選ばれている。[12)]

佐久間以下は有力者のブレーンとして活躍した。渡辺と高野は佐久間以下より少し早い段階で，自分の知識欲から世界情勢を研究した。この五人はいずれも，疑獄事件，断罪事件に連座するか，刺客の手にかかって，非業の死をとげている。

本論文では渡辺崋山（以下崋山という）のキャリアを中心とし，随時崋山をとりまく人々のキャリアを挿入する。

崋山を選んだ理由は次の通りである。

(1)　崋山のキャリアは，小藩（田原藩一万二千石）において幼時から出仕し，各種の仕事を経験しながら，精励恪勤し，重役にまで登っていること。しかも，藩行政に関し，多大のリーダーシップを発揮していることである。これは，組織の世界で自分のキャリアを歩もうとする多くの学生諸君の参考となる。

(2)　実務の世界（藩の仕事）で藩主からの信頼が篤く，藩士間でも人望が

---

11)「新編経世瑣言」安岡正篤，明徳出版，1988年，pp.135-137

12)「日本思想大系No.55」岩波書店，1971年

集っていただけでなく，俗務から離れた絵画の世界で，日本画壇史上に残る仕事をしていること。

これは，自分の職務に精励しながら，文芸，美術の世界で相当の域までに達することのできる一例であり，我々の励みとなる。

(3) 甚しい貧困の中で貧臭を少しも感じさせず，人格高潔の上に，美しい家庭生活を送っている。一般人が私淑するにふさわしい人物の典型である。

(4) 崋山は真摯な意志の人ではあったが，自分の意志を徹底して貫ける人ではなかった。そこが蛮社の獄に連座した高野長英とは大いに異なる。されど，そこに崋山の魅力を感じる人は多い。彼は青年時，長崎遊学を熱望した。しかし，病弱の老父が（一言も反対しなかったが）聰明な長男の崋山に頼り切っており，長男の長崎出奔に心痛していることを感じ，あきらめている。

彼の画は天下の知る所だが，自身は小藩の一家老にすぎぬ。藩籍を離れ，画に一意専念して，その才を更に天下に問う積年の希望は，藩主や藩老からの信頼，藩主三宅家の代々の臣という思いから，遂に実現できなかった。人の世は自分の意思や希望通りにならぬものである。崋山ほど意思の強い人が長崎遊学の意思貫徹をはたせず，崋山ほど画の才能に恵まれた人が画業専一の生活に入れなかったことに，我々は一つの感慨を持つと同時に，一種の良い意味での諦観を持つことができる。

当時，侍出身で名を得た画人が何人かいる。田能村竹田，祇園南海，柳沢淇園，浦上玉堂といった人々である。

これらの人々はいずれも芸術家特有の性質から侍の社会では異質と見られた。[13)]

竹田は不羈放蕩と評せられ，若くして隠居した。南海は放蕩無頼，不行跡の廉(かど)で，知行を召上げられ，十年間謫居を命ぜられている。

淇園も，不行跡未熟之儀相重なり，家督相続を禁止され，別の姓を名乗らざるを得なかった。

---

13)「田能村竹田と渡辺崋山」吉沢忠「日本思想大系第55巻月報No.13」1971年，pp. 1－3

玉堂も，世俗の交際を断ち，画事に耽り，勤仕をおろそかにしたと評され，遂には出奔した。

画では後世に残る仕事をした人々ではあったが，当時の人々の間ではいずれも眉をひそめさせた人々である。

崋山はこれと大いに異なる。恪勤して藩政に奉じて後には重役となり，藩主からの信任も篤かった。芸術家に多い，奇矯な言動など一切なく，あの偏屈な滝沢馬琴すら，崋山の篤実な性格を評し，「学術あり見識あり，其性も亦毅剛なるべし」と書いている。[14)]

ちなみに国宝に指定されている絵画（平成5年3月現在）は全部で（飛鳥・白鳳時代以降から現在まで）123点あり，最も新しいのが崋山の「鷹見泉石像」である。西洋画の技法をとり入れたリアルな表現と従来の日本画の技法とを折衷させた品格の高い作品である。

なお，江戸時代の絵画で国宝指定作品は14点。[15)]

(5)　崋山の周辺には当時の一流の人士が集っていた。これらの人々との交流には趣味深いものがある。崋山の生涯は冤罪による入獄，自刃という悲劇で幕を閉じた。崋山が入獄した時，周辺の人々はどのような反応を示したのか。多くの文人仲間は嫌疑がかかることを恐れ，小心翼々の醜態を演じた。しかし小数ではあったが崋山の救護に尽力した人々もいた。それは当時の環境下では文字通り命がけのことだった。人間社会の醜くさ，崇高さの実例を崋山のケースで知ることができる。

(6)　崋山は実に多くの日記，書簡，メモ類，論文，絵画を残した。これらは現代，活字印刷ないし印刷物（絵画）となっており，我々は容易にこれらに接することができる。崋山に直接ぶつかることができるわけだ。

崋山は，ごく薄い紙質の雁皮紙で作ったノートを常に懐に入れていた。

旅に出ればスケッチし，知人宅や寺社で古画を見る機会があれば，直ちに縮図した。

---

14)「渡辺崋山」森銑三，中公文庫，1978年，p.114

15)「国宝」芸術新潮編集部編，新潮社，1993年

新しい見聞や珍しい知識もすぐに記帳した。写生帳や，「客座掌記」「客座録」等と題した手帳が，生前には背の高さに達するほどあった。[16]「蛮社の獄」で連累の嫌疑を受けることを恐れた人たちが，その多くを焼いたため，現在残っているのはごくわずかである。

家老として藩の激務を担当しつつ，蘭学，産業，軍事等々の研究や，多くの人脈との交際に多忙をきわめ，しばしば過労で倒れることが多かった。50に満たぬ年齢で生涯を終えた崋山に，多数の書画が残っている。しかも，粗笨(そほん)のものがほとんどない。

写生，粉本の両面からの絶え間ない勉強があったからである。

崋山には数多くの書簡があるとともに，世界事情に関する論文も少くない。

蘭書は読めなかったが，蘭書の読める高野長英や小関三英の翻訳，あるいはその他の見聞を常に貯え，整理していたから可能だった。

彼の諸日記に見る，睡眠時間を削っての作画や読書は，彼が精力の人，意志の人であったことをよく現している。

㈡　キャリア概略

渡辺崋山，名は定静(さだやす)，通称を登(のぼる)。寛政５年９月16日，江戸城半蔵門外にある田原藩邸内の長屋で生れた。父は定通，通称市郎兵衛。母は旗本永井大和守直諒(なおのぶ)の家臣河村彦左衛門の女で栄(えい)。

父29歳，母22歳の時の子で長子，長男である。幼名は虎之助。最初の儒学の師，鷹見星皐より華山の号をもらう。後，30歳の頃より崋山と改めた。[1)]

なお，虎之助の幼名（８歳より以前は源之助），通称登（14歳より）のいずれも藩主より戴いた名前である。

初代以来，渡辺家は代々江戸詰であり，７代目の崋山も江戸半蔵門外田原

---

16)「渡辺崋山，スケッチとデッサン」解題藤森成吉，岩崎美術社，1976年，p.8

第二章

1）崋山の全体像把握には「渡辺崋山」佐藤昌介，吉川弘文館，1986年を参照にした。

藩邸内の長屋に住み，生涯の大部分を江戸で暮した。

渡辺家の家禄は百石であったが，父定通は同藩の平山氏の出身で，養子となって渡辺家を継いだので，減俸され15人扶持となった。寛政3年の減俸令で，実収入は12石足らずであった。米を主食とした当時，1人が1年間に食べる量は大体1石であった

崋山は3歳の頃から毎日朝夕奥へ上って，11代藩主三宅康友並びにその夫人から寵愛せられた。[2)]

5歳になった頃には，藩主夫人は外出のたびに幼い崋山を随伴した。[3)]幼児ながらも賢明さが顔面に現われ，容姿に優れるとともに，立居振舞が端麗であったのだろう。

渡辺家は代々藩主の側近に勤侍した。

父も，9代，10代，11代の藩主に近習，納戸役，刀番，取次役，側用人と藩主の側近として仕えた。世子の傅（守役・後見役）となり奥向御用掛ともなった。壮年以降は，年寄加判，年寄役末席となり，重職の一人となった。

崋山も前述のように第11代藩主康友夫妻の寵愛を受け，8歳の時には世子亀吉の伽役（学問や遊びの相手）となった。9歳時に，父は側用人となり物頭（軍事，武器の総括役）を兼ねた。12歳時には父は用人に進んだ。

亀吉が夭逝すると，次の世子元吉の伽役となった。14歳である。この時，父は元吉の傅となり奥向御用掛を兼ねた。父が守役，子が勉強相手，遊び相手となって，世子に仕えた。

15歳に近習役，中小姓格となり，翌年には父は年寄役加判となった。

17歳時，世子元吉（12歳）は12代藩主となり，名を康和と改めた。この時，父は幼少の藩主の傅を兼ねた。

22歳で納戸役となり，翌年は刀番を兼務するとともに供頭を勤めた。

25歳時，父は年寄末席となる。

2）「森銑三著作集第6巻」中央公論社，1989年，p.117

3）「渡辺崋山集第7巻」小沢耕一，芳賀登監修，日本図書センター199年，p.90。以下の「渡辺崋山集」の各巻は監修者，出版社，発行年は皆同じ

27歳時，藩主が江戸城和田倉門番所詰を命ぜられたため番士となる。和田倉門を守る将校である。翌年には使番役に進むとともに番目付も勤めた。和田倉門守衛隊の参謀将校とでもいえようか。

31歳時，藩主康和が死去し，康和の弟が襲封し康明（13代）と名乗った。

32歳で父が死去。34歳時に取次役となった。この年，藩主が江戸城一ツ橋門番の役に当り，番頭控を命ぜられる。一ツ橋門副守衛隊長である。

35歳時，13代藩守康明死去。

第14代には播州姫路酒井家より養子を迎えた。康直である。

36歳のこの年，崋山は側用人，中小姓支配となり，老公の傅も兼ねた。

40歳に，年寄末席となり，老公友信の男仙太郎（せんたろう）が藩主の後嗣となることが決り，その傅を兼ねた。

44歳で江戸留守居役。藩政多忙をきわめたために大病。

46歳，退役願を提出するも却下。

47歳，蛮社の獄に連座，在所蟄居の判決。

48歳，田原へ護送される。

49歳，自刃。

崋山の風貌について少し記しておきたい。

田原藩三宅氏の居城のあった愛知県田原町所属の絵に，崋山の高弟椿椿山の描いた「渡辺崋山像」がある。人物画の名手崋山の高弟の筆だけに品格のある写実的な肖像画である。

広い額，太い眉，切れ長の目，ヒゲの剃りあとが青々しい。恐らく晩年の40歳台後半の肖像であろう。椿山は師崋山の自刃後に師の姿を想起しつつこの肖像画を描いた。やや武骨な感を与えるが整った顔立である。威厳を感じるが目は優しい。古語の「威アッテ猛（タケ）カラズ」がぴったりする。

崋山はいわゆる蛮社の獄に連座する。当時の捜査役人，小人目付小笠原貢蔵は上司の目付鳥居耀蔵へ崋山の人柄や言動についてかなり詳しく報告している。その中に，「平常粗服を着，長剣を帯し，応待静かにして，逢い候もの

は親しみ深く相成り」[4]という記述がある。

先の椿山の肖像画で見ると中肉で長身である。眉太く，上背があり，常に粗服，長剣を帯びているとなれば，一見，剣客と見間違える風姿であっただろう。崋山は軀幹偉大で力量も人に倍していた。[5]

水戸の藤田東湖に「見聞偶筆」なるものがある。その書に曰く。[6]

「其容貌酒落，和気ある中に発露するやうに覚えたり」

崋山の容貌を酒落といい，和気の裡に，その精神の，あるいは蔵するものの発露するのを覚えた，というのである。

㈢　キャリア（Ⅰ）　（中堅時代）

父は巴洲または半軒と号して文芸の趣味もあった。少(わか)くして同藩の鷹見星皐に学んだ。

貧しくして書物が買えず，六経，左伝その他を手づから写して読んだ。[1]同藩の平山氏から渡辺家へ養子として入った。

性剛直にして阿諛せず，しばしば年寄役（重役）に推挙せられながら固く辞して応ぜず，後に到ってその来席に座した。[2]

崋山の10歳頃より，父は病床に伏す生活が続き，崋山33歳の時，父は60歳で死去した。20年にわたる父の大病により，医薬を買うため，家は畳，建具の他は全て質に入れる生活だった。

崋山の筆による「父定通像稿」が残っている。50歳代の肖像であろう。やせていて，慎直な人柄がしのばれる。

病身の夫や長命の義母に仕え，多くの子供達を抱えながら渡辺家を支えて

4）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.223

5）「森銑三著作集第16巻」前出，p.83

6）ibid.,pp.190-191

第三章

1）「森銑三著作集第6巻」前出，p.20

2）ibid.,p.35

きた母は崋山が自刃の時にも健在で，崋山の死に遅れること3年で死んだ。享年73歳。崋山筆の「母栄像稿」が残っている。面長で鼻が隆(たか)く意志の強そうな老女である。60の後半の時の像であろう。

祖母の名前は不詳。崋山39歳の時，96歳の長寿を保って死んだ。

次のような話も残っている。

崋山は主君から賜った古墨を机の上に置いて愛玩していたが，老耄していた祖母は木炭とばかり思い，割って火鉢の中に投じたことがあった。崋山は傍観して大笑するのみであった。[3)]

崋山は骨肉の情の人だった。

崋山の少年期は7人の兄弟がおり，祖母，父母と併せ10人の大家族で，藩から戴く収入はわずか年12石。当時の侍の家の常として，積極的な収入増大策がないのだから，口減らしのため，兄弟の大半を奉公や養子に出さざるを得なかった。

46歳の時，当時を想い出しながら崋山は次のような自叙伝ともいうべき「退役願書之稿」を書いている。

「其兄弟皆幼少にて，七人〈未だ五郎生れ不申〉ほども有之，唯母之手一つにて老祖・病父・私共、其日ヲ送り候事故（中略）貧窮ハ尤甚敷，筆紙ニ尽候処ニハ無之，依之弟共ハ寺へ奉公ニ遣，又ハ出家為させ，妹ハ御旗本へ奉公ニ遣シ，其寒苦艱難之内，幼少之弟ヲ私十四歳計時，板橋迄生別レニ送り参り候時，雪はチラ〳〵ふり来，弟ハ八，九歳にて見もしらぬあら男ニ連れられ跡ヲ振向〳〵わかれ候事于今目前に見え候如くに御座候」[4)]

このシーンは戦前の小学校の修身教科書にも取りあげられた有名の箇所である。

母については次のように書いている。

「私母近来迄，夜中寝候ニ蒲団と申もの，夜著と申もの引かけ候を見及不

3）ibid.，p.38，p.40

4）「渡辺崋山集第7巻」小沢耕一，芳賀登監修，日本図書センター，1999年，p.59。以下の「渡辺崋山集」の各巻は，監修，出版社，発行年とも皆同じ。

申，やぶれ畳の上ニごろ寝仕，冬ハ炬燵ニふせり申候。私親父大病故，高料ノ薬種，薬札，日食之麺類等ニ事欠，畳立具之外，大低質物ニ置尽シ……」[5]

崋山は後に無実の罪のいわゆる蛮社の獄で入獄する。獄中から若年よりの親友で当時江戸留守役だった小寺市郎右衛門に次のように書いている。[6]

「老母事唯一刻も忘れ不申，夜中度々母ヲ呼候と而（獄中の）同室之ものニ被笑申候。思い出候得ば唯落涙のミにて赤子ノ如くニ御座候。私母を思事如此，母私ヲ思ふ事も又倍シ可申候」(天保10年6月11日，小寺市郎右衛門宛)

12歳の時，崋山にとって忘れ難い事件があった。日本橋辺を通行中，備前候の先供につきあたり，供の者に捕えられ，打擲（ちょうちゃく）された。

行列の主は同年輩の少年である。崋山は「退役願書之稿」で次のように回想している。[7]

「子供ながらも大息仕り候ハ，右備前候，御年大体同年位ニて，大衆ヲ引，御横行被成候事，同じ人間にて天分とハ申ながら発憤ニ不堪，今より何也と志候ハヾ，如何ナル義にても出来可申と存」と発憤した。

崋山は年上ながら話のあう藩の祐筆高橋文平に相談し，意見を聞いた。高橋は儒者になることを勧めた。成功すれば，大名から高禄で迎えられ，師を以て遇される可能性もある。

父の師でもあった田原藩の儒者鷹見星皐（せいこう）の門に入った。

しかし，儒者として大成するには時間がかかる。数年後に放棄せざるを得なかった。

再び高橋文平に相談する。

高橋は崋山が幼少より画が好きで，しかも画才があると考え，「とても学問などと申，儒者に相成候とて，金のとれ候義ハ無之，いずれにも貧ヲ救ふ道第一也」[8]と，画の道はどうかと諭した。

5）ibid.，p.59

6）「渡辺崋山集第4巻」p.39

7）「渡辺崋山集第7巻」p.58

8）ibid.，pp.59-60

画家になれば家計の貧窮を救うことができると信じた崋山は，師の星皐に紹介状を書いてもらい，町絵師白川芝山（しざん）に入門した。16歳であった。

勇躍芝山の門に入ったものの，芝山は翌年崋山を破門した。附届が少ないという露骨な理由だった。

「然処，貧人ニて附届不行届とて，僅二年にて師家より断りヲ受申候。私も此時ハ如何可仕哉，泣シズミ候」[9)]

父定通はこのことを知って，藩主の姻戚にあたる旗本大森勇三郎の家臣金子金陵を紹介してくれた。金陵は谷文晁の門人。金陵門下では滝沢馬琴の子琴嶺を知った。琴嶺は崋山より五歳若いが先輩であった。

崋山は金陵の門に入ると（崋山17歳）同じ年に金陵の紹介により谷文晁の門にも入った。

文晁は崋山に長ずること30歳。画の師であっただけでなく，崋山の生活援助の手も差し延べた。文化13年（崋山24歳）の日記「崋山先生謾録」によれば，崋山は南部候，真田候，柳沢候などの諸候から画の注文を受けている。文晁の口ききによるものだろう。[10)]

村松梢風は「本朝画人伝」の中で，「古来を通観して，わが国では文晁ほど大きく流行した画家はなかった」と書いている。

文晁は大流行画家で，彼の居宅写山楼には画の依頼者が門前に市をなした。[11)]多作家の文晁も注文をさばき切れず，高弟に構図を与えて描かしめ，最終の仕上げの段階で自ら筆をとったこともある。模写などの注文には弟子達にやらせたこともあった。文晁はこういう機会を利用して崋山に収入の道を作ってやった。

19歳。師鷹見星皐が死んだ。佐藤一斉の門に入る。

蘭医吉田長淑を知ったのもこの頃である。

24歳。椿椿山（16歳）が金陵に入門。椿山を初めて知った。この年には末

9）ibid.，p.60

10)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，pp.19-20

11)「本朝画人伝（巻2）」村松梢風，中公文庫，1976年，p.267，p.232

弟五郎が生れる。24歳歳下の五郎を崋山は愛した。

崋山がスケッチした2～3歳の頃と思われる「五郎像」がある。淡墨と線だけの簡易な素描ではあるが幼児の利発さと，描き手崋山の愛情が伝わってくる。通称五郎，名は定固。如山と号し，書画をよくした。末子のため母に愛され，崋山は五郎を自分の養子とし，渡辺家を継がそうとした。不幸なことに22歳で病死。

画業に勤めるといっても紙や筆を調えるだけの家計の余裕がない。燈籠，紙鳶（たこ），団扇（うちわ）などの絵を描いて，これを買って貰って，これで紙や筆を調へ，余分のものは家計の救けとした。

「少々ハ出来候様ニ相成候得共，半紙ヲ調候手段無之，初午燈籠之画ヲ作り，百枚にて壱貫之銭ヲ取，日本橋弐丁目遠江や，麹町天神たこやにて憐ヲ乞，冬分ニ相成候得者，右ヲ以紙筆ヲ調申候」（退役願書之稿）。[12]銭一貫は文政期で大体六・六分の一両である。[13]

崋山は画を描くことによって，「急にしてハ親の貧ヲ助ケ，緩ニしては天下第一の畫工と相成可申，一事ニ思ひを定メ」[14]（退役願之稿）たのである。

「意志のある所，道が生れる」との西洋の諺がある。崋山の場合が好一例である。石川淳は，「これほど率直に金銭をうる目的で，芸術に取りついた例は少ない」とし，「個人の才能と周囲の幸福と，実際上の打算と芸術の栄光と，全てがこれほど美しく好都合に結合した例は更に少ない」と驚嘆している。[15]

崋山は，23歳の文化12年，江戸で版になった文人画家の書附に東の方65名中の第27位に「花山のほり」と画名が記載されるようになった。[16]さらに3年後の文政元年に出た「江戸當時諸家人名録」には，「畫。崋山，名定静，字子安，一号全楽堂，麹町渡辺登」と採録せられている。[17]

---

12)「渡辺崋山集第7巻」p.60

13)「名画の値段—もう一つの日本美術史」瀬木慎一，新潮選書，1998年，p.286

14)「渡辺崋山集第7巻」p.61

15)「渡辺崋山」石川淳，筑摩叢書，1970年，p.12

16)，17) ともに「森銑三著作集第6巻」前出，p.58

ようやく，崋山の画技が世に認られ始めた。

崋山23歳時の１年間の日記「寓画堂日記」が伝えられている。[18]当時の崋山の日常がよくわかる。

文化２年の元旦，崋山は卯の刻（午前６時）に起床し，試筆として萬事吉兆図というものを描き，沈南蘋（清国の画家）の太平雀図を模し，午後更に古木八歌図を写した。夜は読書して子の刻（午後12時）に到った。（原文。卯刻起。試筆，成万事吉兆図，並摸南蘋太平雀画幅。午後写古木八歌図，夜課書見，子刻（寝））

３日には夜より彩燈画（初午燈籠の畫）を描いて子の刻に寝た。正月３ケ日の内から内職の絵にとりかかったのである。この３日から毎日のように彩燈画を描き，初午の直前の２月１日に到っている。２月１日には午前６時に起床し，午前中一杯彩燈画を描き，昼は江戸藩庁に出勤，帰宅後再び筆を染め，全てを完了させ，湯に入っている。１月３日からこの間，古画を模写し，注文画を描き，文晁邸の写山楼や友人の山口直温邸を訪れた。

野望は青年の特権である。当時，国外から入ってくる文明の光の窓は長崎だった。長崎は日本の中の外国だった。忠孝を価値観の第一に置く崋山も長崎遊学の魅力をどうすることもできなかった。長崎で外国の風物に接し，支那人の画家にも学びたい。藩籍を離脱して長崎に奔ろうと思った。主君の三宅康和には，幼少の世子の頃より伽役として仕えてきた。高齢の祖母，病床に伏す父，貧窮の中で家の柱となって働いている母を捨てて長崎遊学を決心する。

「とても此ありさまにて，一助可相成芸ハ出来がたく，ましてや天下第一人と相成候事出来不申，何も眼前小孝ヲ尽し候よりハ，古人游学の例にならひ，後々孝養ヲ尽シ可申，大道ニ於而さほどの間違ひも有之間敷とひソかに長崎表へ出奔之志を起シ候」（退役願書之稿）[19]

18)「渡辺崋山集第１巻」pp. 6 - 8

19)「渡辺崋山集第７巻」p.61

しかし，結局，崋山は長崎遊学を思い留まさらざるを得なかった。長年大病の父は気が弱っており，聡明な長男にすっかり頼り切るようになっていた。

「親父早ク，此様子ヲさとり，心痛仕，太白堂莢石（らいせき），堀備後などへ相頼，私之心ヲ解き候よし。其頃私夜中遅く帰候処，親父病ヲ抱へ，途中迄迎ひニ出候を，私早ク相察シ候得共，私ニ不知様ニ帰宅致，しらぬ顔にて私へ相挨致候時，私も胸塞，竊（ひそか）ニ両袖ヲ湿シ申候。此一時ニ感ジ，又々志もくだけはて」（退役願之稿）たと後に述懐している。[20]

31歳。田原藩士和田伝の女たか（17歳）と結婚。

この年，「心の掟」と題して自省の項目を定めた文章を書いている。

その中には，「学問をして遠く慮り，画をかきて急を救ふ事。書物は経書畫書此外不可見候事」の一条があり，最後には「両親御出被成候中は，事を曲ても内職等出精いたし，困乏を救ひ候手段第一に心得，御両親之御安心を鬼神に誓ひても可奉祈事」と結んでいる。[21]崋山は人物が穏かで，人好きが良かったからともすれば汎交に流れようとした。[22]そのために時間を浪費することが多かったのを戒めて交友を13人に限ろうとする項目もある。

この年，藩主康和が26歳で死去し，康和の弟が跡を継いだ。第13代藩主康明（24歳）である。

翌年父が病死し，家督を相続した。この年には鈴木春山を知った。

35歳。13代藩主康明が28歳の若さで病死。康明には子供がいなかったが22歳の異母弟友信がいた。

藩は前年来の一ツ橋門番の公役で苦しい台所が更に苦しくなっていた。藩主脳は持参金付の養子を迎えて危機を乗り切ろうとし，姫路15万石領主酒井忠実（ただみの）の6男稲若を選んだ。これに対して藩主の側近は，児島高徳以来の名家を誇る三宅家の血統が絶えるとして反対し，康明の異母弟友信の擁立をはかった。

---

20) ibid., pp.61-62

21)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.25

22)「渡辺崋山」森銑三，前出，p.105

崋山は父と同様，歴代藩主の側近くで仕えてきた。藩主一家に親近感を抱いており，藩主脳部への反対派の先頭となった。

崋山らは押し切られ，養子稲若が康直と名乗って第14代藩主となった。

藩主脳部は反対派を慰撫するため，友信に前藩主の格式を与えて老公と呼び，巣鴨に別邸を設けて優遇し，崋山を側用人に抜擢して友信の付人とした。この時，崋山は中小姓支配となり友信の傅も兼ねた。

この文政10年には平河社内三国屋楼上で崋山主催の書畫宴を催した。主催者が場所と酒肴を用意しての書画販売会である。53人の来客が集った。江戸画壇では崋山の声名は定ってきた。[23)]

この年，崋山は「日省課目」を書き，日課表を定めている。

その中で，「愚中巳（ぐちゅうみ）（午前10時）画いて人の索めに応す」とし，次の付記をつけた。[24)]

「余つねに思う。この時妙絵を臨揆し，法書を影写すれば，必ず技において進まんと。しかるに困乏飢饉に及び，わずかに画を以てまぬかる。故に一日画を作らざれば，一日の窮を増すのみ。ただ身窮するのみならず，上に二母の養を欠き，下は弟妻の慈を欠く。余の画，是を以て農の用，漁の畋の如く然り。あに歎ぜざるべけんや」

㈣　キャリア　（II）（重役時代）

崋山の人生の目標は重役（家老）になることではなかった。家老になったとて一万石強の小藩の重役であるが，画においては既に江戸画壇の名士の一人である。自分の才は画であると思っている。画であれば天下の名声を得つつあるが，侍としてでは小藩三宅土佐守の一家来にすぎぬ。

40歳の天保３年年，寄役（家老）を命じられた。

---

23)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.28

24)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.35

固辞したが主君の命を辞退し通すことはできなかった。

友人鈴木春山（田原在住）への書簡で，藩籍を離脱して画業に専念できぬ自分の優柔さを嘆いている。

「僕事不図蒙亢位（高位），日夜戦々罷在候。御察可被下候。一体僕事性来疎懶之上，幼少ヨリ画ニ志スニ死を以テシ，他事不顧処，父ノ大病ニ逢，因循委蛇及今日候。其実ハ抱二心候にて，罪莫大焉候。（略）僕ハ後苑之幽花，固（もとより）棟梁ノ材ニ無之，家庭芝蘭ヲ生ズル，誰カコレヲ不憐也。唯コレヲ知ルモノ足下一人也。臨紙歎訴如此候」[1]（家老就任後の書簡，月日不明）

鈴木春山は崋山より8歳少い田原の人。家は代々医を以て三宅候に仕えた。[2]20歳で長崎に遊び，数年間西洋医術を学んだ。35歳で再び長崎に行き，蘭語を深め，西洋兵学を研究した。崋山の師松崎慊堂に崋山自刃を伝えたのは春山である。

また在藩の同志真木重郎兵衛定前苑（さだちか）の書簡（推定天保9年7月7日）には次のようにある。[3]

「先（まず）予ガからだハ燧石（ひうちいし）箱程の（小藩の）家老，味噌用人（貧乏旗本の用人）に毛のはえたる，十分事成た処ガ掌程（たなごころ）の片田舎也。予ガ手ハ天下百世の公手，唐，天竺迄も筆一本あれバ，公行出来申候。ナントおしきものにハ無之ヤ」

重役になってからも崋山にとって一番やりたいこと，時間を割きたいこと，天下に通用する自信のあったことは，画であった。

しかし，崋山は精神内面の欲求に応じて画業に専念することはしなかった。藩務に精励恪勤したのである。

崋山は現藩主康直の就任に反対し，前藩主の異母弟友信を押し立てようとしたグループのリーダーであったことは誰も知っている。

第四章

1）「渡辺崋山集第3巻」pp.107-106

2）鈴木春山に関しては「森銑三著作集第5巻」中央公論社，1989年，pp.195-214

3）「渡辺崋山集第7巻」p.66

当時事を荒げることを恐れた重役達は，友信と崋山と他に2人を田原に招いて，友信を城内の藤田丸に，崋山を藩校成章館に軟禁している。

そのような藩主や藩当局が崋山を重役の列に加えざるを得なかったのは何故か。

崋山に一点の私心がなかったこと，その聡明，重厚な資質が藩内では周知されていたためである。家柄が重視される当時にあって，謹直な父が代々の藩主の身近に仕え，信頼を受けていたことも，その原因の一つであった。

崋山の絵の内職も江戸藩内で知らぬ者はなかった。

内職が「お役への精励不足」として悪声を浴びること，その収入が多ければ多いほど同僚から嫉視を受けることは今も昔も変らない。

誣いられることは必定である。

不思議なことに崋山にはそれが無かった。嫉視渦巻く小さな人間社会では奇跡的なことである。

その原因の一つは温好篤実誠実，重厚な崋山の人柄であろう。

もう一つは，崋山が貧窮にあっても，金銭に甚だ恬淡だったからと思われる。

40歳（天保3年）の日記の年末には，「このとし窮迫きハまり衣服書物等質にいれて年をむかふ」と記している。[4)]

翌天保4年春には田原へ公用出張した。出張旅費6両を賜ったが足らず，田原在住中，衣類を入質して2分2朱を得て辛じて一時を凌いだ。[5)]

当時，崋山の画名は高く画の依頼は多かった。師文晁の年間画料収入は千両ともいわれ，一万石の大名並といわれる程の豪勢な生活ぶりだった。[6)]師ほどとはいかないとしても，その気があれば，相当の蓄財は可能であった。にも拘らず，重役就任後の後年に於ても常に窮迫の連続であった。

崋山は膨大な日記，手記，書簡を残したが，潤筆料に関する記載は一ケ所

4）「渡辺崋山集第1巻」p.276

5）ibid.，p.300

6）「本朝画人伝（巻2）」前出，p.232

もない。[7)]

彼と同時代人に文人頼山陽がいる。山陽は崋山に長ずること13歳。崋山の重役就任（40歳）の年に死んでいる。山陽の残された書簡の多くは潤筆料の不平を記したもので，各地を周遊した時も「銅臭（金に汚い）」の風評が常につきまとった。

崋山は潤筆謝礼の多寡を問題にしなかった。謝礼は受取ったまま包を解くこともしないで，その辺に捨て置くこともある。崋山の留守に門人が画室を掃除すると，そうした包が幾つも出てきた。[8)]

本稿は経済学部の紀要に掲載される。

画の値段について記したい。もとより，画の値が芸術的価値の多寡を決めるものではない。時代の需要と供給が決めるものである。

美術市場が成立したのは幕末期である。

崋山死後10年の嘉永4年発行の「寛政以来関東名家書画値段付」によると，画一点（小品）の市場での相場は文晁で2分（1/2両），崋山は10匁（1/6両）であるが，[9)]その更に10年後の文久元年に売り出されている「新書画価格録」には，文晁30匁，崋山45匁となっている。[10)]当時の高価人気画家は円山応挙で10両，池大雅は2両2分である。[11)]

更に2年後の慶応2年の「南宗書画品価録」によれば文晁1両，崋山2両，椿山1両である。[12)]

崋山の作品で特徴的なことは，時代が下るにつれて需要が増え，従って高くなっていることだ。後世の人々の冷静な眼に耐え得るもの，言葉を替えれば「本物の芸術品」との評価が高くなってゆくのであろう。

7）「森銑三著作集第6巻」前出，p.178

8）ibid.，p.178

9）「名画の値段」前出，p.112

10）ibid.，pp.112-113

11）ibid.，pp.92-93

12）ibid.，p.113

生前に流行作家となった人々の絵は，一般大衆にも理解されやすい，温雅で個性の少ない画風がほとんどである。流行作家だけに注文が多く，多作になる。こういう作家の絵は，作家が死ぬと一挙に値が崩れるのが通例だ。

崋山の師，文晁の作品がそうだった。文久元年に崋山の10倍もした応挙の絵も然りである。

崋山死後80年の大正８年の画商による入札会で，崋山の「花卉鳥虫魚帖」は５万１千円で落札している。[13]当時の数少ないエリートである高等工業（現在の新制大学工学部）卒業者の初任給は20円台であった。

昭和８年の入札会では崋山の「千山万水図」が５万１千980円で落札したが[14]，応挙の双幅「藤に鷭（ばん），南天に鴨」は６千210円での落札だった。[15]かつて崋山作品の10倍の値を呼んだ応挙作品は逆転した。

昭和６年から昭和15年までの公開入札会で，崋山作品は６点の落札が公表されている。前述の「千山万水図」を除いて，全ていわゆる花鳥画で，落札値段は６万円から10万円である。[16]

多くの依頼画は描くが，画料に関心が薄く，これが為に家が富むこともなく，常に貧窮であったことが，同僚，上司の嫉視を生まなかった原因ではなかろうか。

森銑三は，「崋山ほど貧乏の体験を十二分に持ちながら，崋山ほど貧乏の匂（にほひ）のしなかった人も珍しい」[17]といっている。

恵まれない境遇から身を興し，世に這い上った人々は，一般に意思は強靱であるが嫉視排擠（はいせい）の念が強く，権力や金銭に執着するのだが，崋山の生涯にはそういう点が一切見られない。

森銑三はまた，「崋山のような勝れた芸術家が藩の俗務に貴重な時間を費さ

13）と14）ibid.，p.113

15）ibid.，p.93

16）ibid.，p.113

17）「森銑三著作集第６巻」p.176

ねばならなかったことを思うと，まことに気の毒な感じに堪えない。」ともいっている。[18)]

縦(ほしいまま)に絵筆を執りたいのだが，崋山は藩の俗務に恪勤した。それも嫌々ながらの受身で先輩重職や主君の命に従ったのではない。後述するように先頭に立って藩行政にあたっている。しかも，1ケ月のうち6日は巣鴨の老公に側用人として伺候せよとの命も受けていた。[19)]

主君康直は譜代の名家姫路藩主酒井氏の出であるだけに苦労知らずのわがままの所があった。身分不相応の普請をしたり，田舎の田原は食物がまずいと苦情をいったり，多数の侍女を召抱えようとしたりした。

また，幕府内の奏者番になりたがった。[20)]

奏者番とは江戸城中で将軍と大名の取つぎをしたり，将軍の名代で慶賀を伝えに大名邸を訪れたりする役だ。これはと思われる譜代の青年大名が任命される。この役を無事勤めれば，寺社奉行や旗本監視役の若年寄に抜擢される。奏者番は譜代大名が幕閣へ昇進する登竜門であった。

しかし，幕府の役職につくには多額の運動費がいる。財政破綻寸前の田原藩でその運動費がまかなえるはずがなかった。

重役となった翌年（41歳）田原に赴き，4箇月滞在した。領内の視察を行ない老臣と協議を重ねた。限界に達していた藩財政の窮乏を救うため，抜本的改革が必要と考えた。

藩の支出の増大を藩士の給料を下げることで凌いできたが，このような消極策ではどうにもならなくなっていた。

崋山の藩政改革の第一は，「教化」と「養材」であった。[21)]前者は道義の高揚による藩内秩序の再建で，後者は藩の行政にあたる行政官の育成である。このためには，藩校成章館の再建をはかった。教育方針は実学中心である。崋

---

18) ibid.,　p.176

19)「本朝画人伝（巻3）」村松梢風，中公文庫，1976年，p.43

20)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，pp.55-59

21) ibid.,　p.61

山はいう。「学問は華美を遵バず，唯実用第一」「実用計(ばかり)，虚文は阮元（清朝の有名学者）之如きものたりとも入用ニ無之候」（真木定前(さだちか)宛書簡）[22]

教化と養材は，人材登用と結びつかねば効果は期待できぬ。

従来は，家格と役職が固く結びついていた。これを，家格に関係なく，それぞれの役職につけるようにしようとした。[23]

そうして給料を格高制とした。職務により報酬額を定めたのだ。もっとも急激な改革は不利な者の反発を買うので，格高制の導入によって，減俸となる者にはその１/10ないし１/20を補償するような手段をとった。

格高制はこの年の12月，藩主の名で公布され，翌天保５年から５箇年間実験的に実施されることとなった。[24]

第二は殖産興業策である。農学者大蔵永常（1768—1860）を田原に招き，日田喜太夫と改名させて六人扶持を給し，村奉行の配下とし，藩士２名を御産物掛に任命して大蔵の配下とした。[25]

大蔵は稲作技術の改良，鯨油による稲の害虫駆除法を伝えるとともに，金になる作物の栽培を指導した。田原藩の風土から甘庶の栽培と砂糖の製造を指導した。ローソク用の蠟(ろう)製造とその原料の櫨(はぜ)の栽培，製紙法とその原料の楮(こうぞ)の栽培も同様に指導した。[26]

いずれも西南の雄藩の有力な財源となり，藩経済を立ち直らせた換金作物である。藩士の内職として土焼人形の製造も伝授した。

藩行政の第一は領民が飢えぬようにすることである。「天保の大飢饉」とよばれる飢饉は崋山が重役に就任した翌年から数年間続いた飢饉である。天保６年（43歳）には，藩主に進言して報民倉を設けて米穀を貯蔵し，万一に備えた。

---

22)「渡辺崋山集第３巻」p.101，p.269

23)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.62

24) ibid.，p.69

25) ibid.，p.66

26) ibid.，p.66

この頃になると藩当局は崋山を頼りとするようになり，多忙を極め，疲労で倒れたが，無理に執務を続けたため再び倒れて，一時危篤状態になった。[27] 幸い快方に向っても，在所の老臣たちが凶荒対策のため江戸の崋山に対策を相談にくる。連日のように協議を重ねる無理がたたって気を失うことまで生じた。[28]

天保7年9月には，田原藩近くの他領で一万人の一揆が広がった。藩主康直は動転し，崋山を田原に招いて飢饉対策を立てさせようとした。崋山は病床にあってできない。前年に草した藩主三宅康直宛の「凶荒人君の心得」と「領中之ものへ申渡」を在所用人真木定前に送って善処を依頼するとともに，昨年来より収集した救荒関係の書物を送って益に供しようとした。「凶荒人君の心得」の一節には，「御領中幾万人の内，たとえいかに賤敷小民なりとも，一人にても餓死流亡に及び候はゞ，人君の大罪にて候」とある。[29]

天保の大飢饉に際し，田原藩では報民倉を開いて窮民にほどこすとともに，藩主の参勤の延期を願い出て，出費を減らし，これで領民の救済にあたった。

崋山は疲労困憊(ぱい)の藩主，藩士を励まし，領民の動揺を防ぐ目的で，幕府が藩主に褒詞を与えて欲しいとの内願書を草し，知己の幕府要人を通して幕府に提出した。内願書は次の文章で終っている。[30]

「右は外聞飾之為奉内願候ニは無之，両年引続候大饉ニ而上下一同必死精力を尽，相凌ぎ候得バ，荒後疲労之程，何分無心元，痛心至極仕候。若内願之通，被仰出も御座候者，土佐守様始御家来，御領中共一同，気力を引立，以御威光後々取治方出精仕度候。この段可相成義ニ御座候哉。偏奉内願候。以上。(天保9年閏4月22日)

天保9年8月17日，老中列座の上，勝手掛（財政担当）老中水野忠邦から藩主康直に対しつぎのような将軍からの褒詞が与えられた。

---

27) ibid.,　p.68

28) ibid.,　p.69

29)「渡辺崋山集第3巻」p.160

30) ibid.,　p.246

「三宅土佐守。其方領分去る申年（天保7年）不一通違作之処窮民救方手当等格別行届き候由相聞一段之事に候。此段可申聞旨御沙汰に候」[31)]

全国的に大量の餓死者を出した天保の大飢饉である。無為無策であれば他藩と同様，藩内に餓死者を生じ，百姓一揆による主導者の処刑といった惨事があったとしても不思議でない。

義民倉の設立，参勤交替の中止や撫恤（ぶじゅつ）金の放出，食べられる植物の周知，農学者大蔵常永の採用と，これによる指導，といった諸施策により天災を乗り切った。

自藩だけでなく，天保8年には田原藩は京都三条大橋のほとりに救い小屋を設け施米を行っている。[32)]

同じ天保8年，崋山の指導により，農事，農政の講習会が田原で行われた。講師は佐藤信淵，聴衆は藩士，名主等である。佐藤は崋山の依頼により田原藩のために「田畯年中行事」を著した。[33)]佐藤信淵（のぶひろ）（1769—1850）は崋山に長ずること24歳。出羽国に生れ，経世家をして名声高く，諸候，諸藩士など教えを乞う者が多かった。

以上，飢饉関係について書いたが，この他にも藩政のため奔走した。

天保4年（41歳），公務で田原を巡回中，急拠，江戸へ寄びもどされた。

紀州船田原漂着事件である。難破した商船の積荷が流れついた。海岸の領民がこれを拾い，隠したり，売ったりした。荷主側は御三家紀州藩の威によって公儀へ訴えた。崋山は幕府に陳情し，関係者の間を奔走し，一方で関連領民を訓戒しつつ，何程かの賠償金で示談が成立した。[34)]

天保3年(40歳)，幕府は田原領民に対し，東海道五十三次のうち，田原藩

31)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.53
32) ibid.，p.52
33) ibid.，p.53
34) ibid.，p.46

領内の二つの駅の白須賀と二川宿の助郷賦役を命じた。助郷とは，この二つの駅への人馬による無料労働奉仕を命ずるもので，労働力を奪われる領民の難渋は大きいものがあった。

助郷賦役のことを知った崋山は8月8日，文人仲間で面識のある勘定吟味役中川忠五郎に会って事を尋ねた。中川は免除の内願は遅くて間に合わぬ恐れがある，といった。崋山は翌日直ちに内願書を草した。[35)]

遠州灘に張り出した田原藩にとって海岸防備の備えは喫緊の事項であり，領内の壮丁が助郷使役に取られることは，海岸防備の為に甚だ不都合となる，という内容である。[36)]

直ちに浄書し，領内の絵図面，海上監視所図，三河の地勢図とともに中川に差し出した。[37)]急を要することだったので，田原の重役に相談できなかった。崋山は11日付で，田原在住重役に，事の次第を報じ，助郷免除願の無断提出をわびる進退伺書を書いた。[38)]

13日，鰹節一箱を持参して中川邸に礼に赴いた。中川より十中八，九は内願の通りなろうとの話を聞いた。[39)]

幕命による助郷問題は，藩老が幕閣に願書を提出するという通常の形では解決が難しかった。崋山は知人の幕府要人と直談判で一挙に解決したのである。

天保6年になって幕府は再び助郷賦役の内命を出す。この時も崋山は助郷免除歎願書を書いて，この話は結局，立ち消えとなった。

助郷割当の村々は崋山への謝礼として，天保6年米25俵を送ったが崋山は受け取らなかった。

天保9年には改めて30両を崋山に贈った。崋山は再度のことで断りがたく，村々の復興資金として活用させることにしている。[40)]

---

35)「渡辺崋山集第3巻」pp.74-75

36) ibid.,　pp.134-136

37) と38) ibid.,pp.74-75

39)「渡辺崋山集第1巻」pp.269-270

2年前の難船事件の時も崋山は同様のことを行っている。[41)]

天保5年春，幕府勘定所の役人が幕府指定の干拓田開発の見分のため田原に出張してきた。この地では塩を作り，海草を採り，領民は，これによって生計を立ており，藩もこれに課税して収入の一助としている。

崋山はすぐに願状を草した。住民の生活，藩の財政，海防上枢用の地という地理上の問題点からその非を論じたものであった。[42)]

この件も撤回せられた。

これらの華山の動きを見ると，行動が受身でないことだ。藩老の指示を待って行動する，という態度ではなく。その行動は敏速であり，おっくうがったり，骨惜しみする所が全くない。幕閣への内願書を草することにも臆(おく)することがない。幕府高官の人脈活用にも躊躇(ちゅうちょ)がない。

(5) キャリア　(Ⅳ)（好奇心）

知識欲旺盛な崋山が青年時より蘭学に関心を持っていたことは容易に想像できる。長崎遊学を固く決心したこともある。これは前述した。

23歳の日記「寓画堂日記」には蘭医吉田長淑との交渉が何度も出てくる。

蘭医桂川甫賢(ほけん)とは文化14年（崋山25歳）の書画会で知りあって以来親交があった。[1)]34歳の年の文政9年，オランダ商館長が江戸参府した。この時シーボルトとその助手のビュルゲルも江戸に来ており，崋山は蘭人の定宿であった本石町の長崎屋で対談している。桂川ないし，桂川グループの人々によるあっせんによると想像される。[2)]

---

40)「渡辺崋山集第3巻」pp.238-239

41)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.46，p.48

42)「渡辺崋山集第3巻」pp.119-120

第五章

1），2）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.82

天文方の高橋景保が禁制の日本地図をシーボルトに与えた嫌疑からのいわゆるシーボルト事件が起ったのは，この翌々年の崋山36歳の時である。

このように，崋山は蘭学に興味を持ち，蘭学者とつき合っていたが，本格的な蘭学研究を志すのは田原藩の重職となり，海防を担当してからである。

崋山は後に政治疑獄事件に連座し，入獄の身となる。この時の供述書があり，崋山口書といわれる。この口書に次のような記述がある。[3)]

「私儀（略）辰(たつ)年（天保3年）年寄役末席被申付，相勤罷在候。異国船渡り候節，海岸心得方之儀ニ付、前々之御書付，並文政八年酉(とり)年被仰出候趣モ有之，主人領分三州田原儀ハ遠州大洋へ出張(でばり)候場所ニ付，私儀海岸掛り被申付，於御当所右用向相心得罷在候。

右ニ付，異国船渡来ノ節，不調法無之様，常々致心配，西洋蛮国ノ事情，教政軍事等ノ儀，心得居申度，御留守居松平内匠頭様与力青山儀兵衛借地長英，岡部内膳正様医師小関三英，水戸様御家来幡崎鼎等ハ蘭学ニテ名高キ者ニ付，知ル人ニ相成，長英ハ主人致推挙，出入扶持相送り，追々蘭書翻訳相頼，難読得廉理義難解者右三人へ承合，蛮国ノ風俗其外一通ハ右書中ニテ相心得罷在候」

江戸時代も後期になると，欧州列強の東アジア進出の動きがひしひしと感じられるようになった。外国船もロシア船と英国船がひんぴんと日本近海に現われるようになった。文政8年（崋山33歳）には異国船打払令が発布され，田原藩では海岸掛という海防担当の役職が作られた。[4)]

小藩とはいえ，三河国で外洋に面しているのは田原藩だけである。既に田原藩では海岸に番所，海岸に近い山々に遠見番所や烽火(のろし)台を設け，村々の農

3）「渡辺崋山集第4巻」pp.295-296

4）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，P80

民も総動員にし事に当る体制を取っていた。

崋山は重職に任命されると同時に海岸掛も兼務した。

崋山はかって藩主に推戴しようとし，現在は巣鴨に住み，老公と称せられている前藩主の異母弟友信に勧めて蘭学を学ばせた。友信の蔵書は兵書だけでも219冊（代金180両）にのぼった。[5)]

当時江戸市中では洋書の販売が許されていなかった。毎年の春，長崎の通詞がオランダ使節の貢物を江戸に運んでくる。この時に蘭書も携えてくる。これを買うのである。

もちろん，薩摩や水戸といった大藩は，蘭書のわかる者を長崎に派遣して値に拘らず購入させていたが，一般の蘭学者はそんなことはできない。

崋山の没後，佐久間象山が友信に近づいた。友信の蔵書が目当だった。[6)]

崋山の蘭学研究は好事家としての興味の対象であったのでもなく，もちろん衒学のためでもなかった。主目的は海防のためである。世界状勢を知ることと，西洋兵学を学ぶためだった。

地理書を通して世界を知り，兵書を研究して西洋式の軍事組織を導入しようとし，同藩の村上定平にすすめて長崎に送り，砲術を学ばせた。また，長崎から最新式の西洋銃をとりよせ，門人の金子武四郎に練習させた。藩邸内で洋式操練を試み，西洋式銃を作るため，蘭書を翻訳せしめた。[7)]

海防を行うためには，まず敵を知らねばならぬ。世界にはどういう国があって，どの国がアジア進出に虎視眈々としているのか。

西洋諸図の政治体制や軍事体制はどのようになっているのか。武器を含め，彼等の強い点はどういう所にあるのか。海防を担当するにはこういう点を知っておかねばならぬ。

崋山が海防のため，各国の政治や軍事を学び始めるのはアヘン戦争の10年前である。

5）ibid.，p.92

6）「森銑三著作集第6巻」前出，p.146

7）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.120

西洋を知るには蘭書を読むしかなかった。

当時，蘭書を読みこなせる人々は江戸でも数少なかった。大部分は蘭医だったが，医学以外のことにも関心のある学究の徒といえば，前述の崋山口書に出てくる，幡崎鼎（水戸藩顧問），小関三英（岸和田藩医），高野長英（町医者）といった人々だった。

(1)　幡崎鼎

幡崎鼎，文化４年生れ。崋山より15歳少い。出生その他は不詳。長崎で蘭人部屋付の小者として藤市ないし藤平と称していた。シーボルト事件に連座し，町預りとなっていたところ，天保元年（23歳）に脱走。大阪で蘭学塾を開き，後江戸に出て，幡崎鼎と名乗って天保４，５年頃水戸藩に仕えた。

天保８年，藩命により蘭書（兵書）購入のため長崎出張。ここで前身が露見し，江戸に護送され，天保９年菰野藩主土方仙之助方お預けとなり，天保13年病没。

崋山と幡崎は親しかったようで，幡崎は長崎出張にあたり，蘭書46巻を崋山に預けた。幡崎が菰野に護送された時，崋山は雪の中，品川まで行き幡崎を送っている。[8)]

(2)　小関三英

小関三英は出羽庄内藩の人。[9)]天明７年生れ。崋山より６歳年長である。少(わか)くして江戸に遊学し，帰国して医を開業。文政６年（36歳）仙台藩に招かれ，医学館蘭医方教授。

２年後，江戸に出て，蘭医湊長安，桂川甫賢の食客となり，翻訳や蘭語の教授を行った。

崋山は桂川と親交があった。桂川からの紹介であろう。三英が崋山を初めて訪れたのは天保２年４月であり，崋山が重職につく１年前であった。崋山

8）ibid.，pp.91-92

9）小関三英については，「小関三英」半谷次郎，旺史社，1987年参照

は日記に次のように書いている。

「小関三栄(ママ)来。三栄出羽庄内人，善読洋書業医。不好治療読書飲酒之外無它嗜。上無君下無妻孥。終日孤然読書而不能自立。衣食住待人而生活。桂川医院愛其嗜学，養之肆其所好云」(「全楽堂日録」天保２年４月16日) [10]

三英は学究的立場に終始した。

天保10年５月14日，いわゆる蛮社の獄で崋山が逮捕されたことを知ると，累が及んでくることを恐れ，同17日自殺した。三英は崋山からの依頼でキリスト伝を翻訳していたが，これが探知されたと，誤信したためといわれる。[11]

(3)　高野長英

崋山の手控「客座掌記」(天保３年) に「高野長栄(ママ)麹町」とあり，崋山が長英を知ったのは，この年，即ち重職についた年と推定される。[12]

高野長英は文化元年奥州水沢に生る。崋山より少きこと11歳。父は水沢伊達氏の家臣後藤摠介実慶。母は美也。美也は同藩の高野元端の子。初め中目氏に嫁すが不縁となり，摠介と再婚し三人の男子を生む。摠介死後は摠介と先妻との間の長男勇吉（後に惣助）と折合が悪く，子供とともに実家に帰った。兄直之進は郷医の養子となり，長英も母の兄高野玄斉の養子となる。

長英17歳の年，兄直之進が医学修業のため江戸遊学に際しては，養父の反対を押し切って江戸へ出，杉田伯元塾に入門した。

江戸での生活には最低月に一両二分必要だった。養父からは春秋の二回四両送金があった。

同郷の薬種屋に住み込み，夜按摩の流しをして生活費をかせいだ。後，加賀藩医吉田長淑の門下生となる。

オランダ通詞出身で，江戸で医業を営んでいた今村東庵が来日したシーボルトに学ぶため長崎に帰ることとなった。今村は老年，多病のため長英に長

10)「渡辺崋山集第１巻」p.257

11)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.90

12) 高野長英については「高野長英」佐藤昌介，岩波新書，1997年を参照

崎遊学を進めて，同道を願った。代償として実家（大通詞今村猶四郎家）に寄寓を許す，という。養父はたびたび送金依頼してくることに怒り，長英の長崎行にも反対した。長崎遊学時代に養父が死んだ時（文政10年）にも帰郷せず，婚約者の千越とも破談の事とし，新しく養子を迎えて高野家を相続させて欲しいと連絡する。

シーボルトの下で鳴滝塾においてオランダ医学に専念した。シーボルトが日本研究に必要とする文献の多くを蘭語に翻訳した。

文政11年いわゆるシーボルト事件が起った。累の及ぶことを恐れた長英は長崎を脱出し，街道筋の宿駅で診療しながら路銀をつくり，天保元年の秋に江戸についた。23歳で長崎に行き，再び江戸に戻ったのは27歳である。

江戸に戻った長英は，水沢に帰って家業を継ぐことも，高野家を相続することも拒否した。麹町貝塚に居をかまえ開業。

崋山との交流の初まりは天保3年。三宅友信の「崋山先生略伝補」には次の記述がある。[13]「たまたま一日先生（崋山）にまみえしより以来，西書訳読の故を以て親しく交友となる。長英は麹町隼町に寓し，本邸の近接なるを以て日に来り，オランダ書を訳読し，先生頗る洪益を得たり」

高野長英のことを長く書いたのは，長英を崋山とは対照的な性格を持ち，対照的なキャリアを歩んだからである。

長英は養父の意向に反した行動を自分の強い意思でとり続けた。江戸遊学，長崎遊学とも養父の反対を押し切った。長崎では蘭学に打ち込んだ。シーボルト事件が起ると直ちに逃亡する。婚約者との婚約も破棄し，養家との縁を切って，一町人となり，蘭学一筋に打ち込んだ。

友人達から無理やりに借金することも意に介さなかった。主君，家族に常に縛られてきた崋山とは対照的だ。重厚，信望，誠実の崋山に対し，長英は狷介，不羈放奔である。

---

13)「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.85

自分の好む学問に一直線に進む。蛮社の獄以降の身の処し方も対照的だった。

我々のキャリアを考える時，二人の人生への対処の仕方は興味深いものがある。

天保10年5月（35歳）蛮社の獄が起ると，連座した。「夢物語」で幕政を批判したとして永牢の処分を受ける。剛毅の彼は屈することなく，獄中で「蛮社遭厄小記」を著し，無実を訴えるとともに，陥れた敵を糺弾する。入牢後は，牢内での実力者（牢役人）となり，新入りから奪う金を貯め，脱牢を決意する。入獄6年目の弘化元年6月，牢内雑役夫の非人栄蔵に金を与えて放火させ，牢の大火を利用して脱獄，逃亡した。

幕府は重要政治犯の上に放火脱獄を行った長英をその威信にかけても捕らえねばならなかった。各地を逃亡し，指名手配中の長英は，島津斉彬から翻訳依頼されたり，宇和島藩主伊達宗城に頼って宇和島でも過して蘭書を翻訳した。後，江戸に潜入し，田原藩医鈴木春山の庇護の下で兵書翻訳に協力した。弘化3年（42歳）にはプロイセン人ブラント著の三兵戦術書を完訳している。この翻訳書「三兵答古知幾（タクチキ）」は，幕末の西洋兵学に関心のある者から争って読まれている。後，江戸の隠家が幕吏の知る所となり，踏み込まれた。逃げられぬことを知った長英はその場で自刃した。

㈥　キャリア（Ⅳ）（入獄）

西洋船の度重なる東航やアジア地域へのロシアや英国の進出に危機意識を抱いた人々が，人望もあり，蘭書によって世界地理や西洋に詳しい崋山の学識と人柄をしたって集まるようになった。

幕臣では勘定吟味役川路聖謨（としあきら），代官江川英竜（ひでたつ），寄合松平内記（旗本三千石），使番松平伊勢守，西丸小姓組下曽根信敦，儒者文人では，幕府儒官古賀侗庵，紀州藩儒遠藤勝助，高松藩儒赤井東海，二本松藩儒安積艮斉（ごんさい），津藩儒斉藤拙堂，水戸藩士立原杏所，八王寺同心組頭松本斗機蔵，田原藩士鈴木春山，村上定平，剣客斉藤弥九郎らである。[1)]

滝沢馬琴とも親交のあった高松松平藩家老に木村黙老がいる。この木村黙老に吉賀精里門下の藩儒赤井東海が，蛮社の獄の顛末を「奪紅秘事」と題して伝えたものがある。この中に，「私方え参候者どもすべて，崋山渡辺登事の蘭学にて大施主など感心致申候」[2]の記述がある。崋山は蘭書の読解はできぬものの，蘭学仲間のリーダーとしての評を得ていたことがわかる。

天保9年12月，老中水野忠邦は，江戸湾防備体制整備強化のため，目付鳥居耀蔵と，代官江川英竜に，相州備場(そなえば)見分を命じた

目的は備場の新設と，その位置選定であり，海岸の測量が必要だった。当初は相模の海岸だけだったが，伊豆，安房，上総の備場見分も追加された。

江川は江川家用人の斉藤弥九郎を崋山の下に送り，測量技術者の推薦を依頼する。崋山は測量と算術に巧みな二人を推薦した。[3]海防に関心を持つ崋山にとって，自分の知見を活用することはごく自然のことであった。

崋山は世間を斜めから見たり，評論家的態度や傍観者態度をとる人ではない。

秘蔵の遠目鏡や測量器具を貸与するとともに，田原藩士を従僕として派遣し，測量を援助した。[4]

江川が蘭学に志したのは，代官としての支配地に海防の要地が含まれていたからである。

はじめ，水戸藩の幡崎鼎に蘭学を学んだ。幡崎の旧悪露見による逮捕の後は，当時勘定吟味役で海岸掛も兼ねていた川路聖謨の紹介で崋山に師事することになった。[5]

江川の兵書，火砲，西洋船等に関しての質疑に関し崋山は数多くの書簡を以てこれに応えている。

第六章

1）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，pp.110-111

2）「渡辺崋山」森銑三，前出，p.211

3）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.189

4）ibid.,p.190，p.195

5）ibid.，pp.111-112

英人に占領される恐れのあった無人島（小笠原諸島）問題が生じた時，崋山は，かねてより熟知の代官羽倉用九が幕命で無人島（小笠原諸島）に渡航することを知る。当時田原藩は天保大飢饉によって財政危機に陥り，重役としてその対処に繁忙を極めていたにも拘らず，藩当局にて申請して，羽倉と同道しようとした。

「蒙重御役候而，軽々敷進退仕候ハ如何敷候得共，御一家之義ハ天下之義にて，今此撰ニ相当候者乍恐私ナラデハ有之間敷存候。(略)

譬途中死候而も天下のために死候得ば，乍恐上ニも御不本意とハ不奉存候。私老母をも不顧，奉願候程之儀ニ候得ば，深御仁察被下置，宜敷御内評奉願候」[6]（無人島渡航願，天保８年12月25日）

藩当局は大飢饉の緊急時に頼りとする家老崋山のこの願を却下した。

主として崋山の努力による田原藩の海防への取組は識者の間ではよく知られていた。

以下は徳川斉明の国元調役への天保９年12月20日付書簡である。

「この度承り候えば，三宅土佐守儀小大名には候えども，家中へ達しおき，不時に夜八ツ時（午前２時）ごろ城内にて烽火（のろし）を上げ候と，みなみなかけ集まり，甲冑にて海岸へおし出し，それより原へ参り調練いたし候よし。さてさて外ながら面白きことと存ぜられ候。こののち国へ下り申し候わば，猪狩等も申冑にていたし申したきことに候。三宅の儀，委細の儀承り候て，あとより申し聞けるべく候。さてさて外々にはよき家老これあり，うらやましきことに候」[7]「(水戸藩史料別記」)

斉明のいうよき家老とはもちろん華山である。斉明は江川英竜，羽倉用九らの開明派幕臣と親しく，彼等を藩邸に招いて海防問題を論じており，崋山の名前を知っていた。

6）「渡辺崋山集第３巻」pp.218-219

7）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，pp.121-122

時代によって強弱重軽はあるが，江戸期を通しての正統派官学は朱子学であり，代々その祭酒として臨んできたのが林家であった。

林家の始祖は林羅山で徳川家康に仕えた。

三代目林信篤の時代，将軍綱吉は信篤を大学頭に登用，湯島聖堂を建設した。

寛政の改革時，老中松平定信は寛政2年，湯島聖堂で朱子学以外の異学の講究を禁じ，7年後には，林家経営の湯島聖堂を官立に改め，更に3年後には昌平坂学問所（昌平黌）を創設し，諸士の入学を許した。以降，唯一の官立の最高学問所として昌平黌は君臨した。

当時の林家の主は林述斉，美濃岩村城主松平乗蘊（のりもり）の三男で，幕命により26歳の時，林家を嗣いだ。

生涯正妻を娶らず，側室数名を持ち，男女17人の子を儲けた。

崋山が29歳頃の筆になる「林大学頭述斉像稿本」が残っている。

この肖像画からは，傲岸不遜，精力絶倫，意志強固，実行力旺盛な性格が感じられる。完成画は，崋山が国事犯となり，判決が下った後に林家で焼却された。[8)]

林述斉はかねてより門下生が蘭学に心寄せていることに苦々しく思っていた。蘭学は，異学どころか蛮国の学である。当時の林家の双璧は佐藤一斉と松崎慊堂。この両者に師事した崋山も林家の一統である。にも拘らず，崋山は「蘭学の大施主」となっており，著名な多くの儒者が崋山の下に集っている。

時の目付鳥居耀蔵は述斉の二男で旗本二千五百石鳥居一学の養子となっていた。鳥居耀蔵も実父述斉と同様に蘭学者を忌み嫌っていた。

鳥居は水野老中に次のような意見書を提出した。

「英吉利斯人来航の噂近来頻りに行はれ候へ共，之畢竟蘭学者と唱ふる輩が，些か外夷の事情に通ずるを幸に，無実の事を捏造して不埒の妖言を逞う

8）「渡辺崋山集第7巻」p.233

し，上は以て朝廷，将軍家をはじめ百官を惑はし，下は以て無智矇昧なる愚民を煽動し，斯くて天下の騒乱を促し，国政を破壊せんとする所存に外ならず候。何卒彼輩を御召捕あって厳刑に処せられ，且は向後とも斯様の邪説申出候もの無之様，此際一時に蘭学を御禁制被下候様奉願云々」[9)]

鳥居は日本歴史上に類を見ない，陰険，残忍，冷酷，執拗のうえ，稀代の陰謀家だった。奸佞で反覆表裏することを恬然として恥じず，ために幾多の名士が思わぬ陥穽(かんせい)に陥らされた。(例えば高島秋帆弾圧事件)

鳥居の奸計によって崋山はいわゆる蛮社の獄に連座する。

㈦　交流　（人の真価）

崋山は多くの著名人との交流があった。

31歳の年には「心の掟」六條を撰している。その中には交わるべき人々13人をあげている。この中には現代の我々にも名が知られている人々が何人かいる。

例えば，佐藤一斉，滝沢馬琴，安積艮斉，谷文晁，市河米庵，立原杏所といった人々である。[1)]その後，崋山の名声が高くなるとともに多くの幕臣や儒者との交流も多くなった。

人が本当に信頼できるかどうか。これは人が落魄した時に白日の下にさらされる。「落ちぶれて袖に涙のかかる時，人の心の奥ぞ知らるる」の古歌は古今東西を通しての真実であろう。

崋山が蛮社の獄により無実の罪を負った時，崋山の友人や師はどのように振舞っただろうか。これらの人々の動きに我々は人のキャリアを考える場合の多くの真実を見ることができる。

肖像画の名手崋山はこれらの人々の何人かの肖像を描き，その人物の往事の姿を知らせてくれる。崋山は肖像画を描く時，数多くのスケッチを作った。

---

9)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.95

第七章

1)「森銑三著作集第6巻」前出，p.88

これらの画稿の多くも残っており，崋山が対象人物に迫った過程を詳く知ることもできる。

佐藤一斉，名は担，通称捨蔵。崋山もその父定通も師事した鷹見星皐の門下。佐藤は崋山にとって同門の先輩である。星皐の死後，崋山は一斉に師事した。崋山に長ずること21歳。崋山は文政4年に佐藤一斉像を描き，落款に「受業弟子渡辺登拝手敬写」と書いた。[2)]

崋山描く50歳（文政4年）の「佐藤一斉像稿」を見れば，眼光鋭く，意思強固な人物が推測される。この歳になっても豊かな黒髪の髷である。画稿(下村観山旧蔵）が2枚残っており，上部に第2，第11と記してある。2枚目，11枚目の下図の意味と思われる。とすれば崋山は少くとも11枚の画稿を作っているのである。[3)]

市河米庵は高名の書家であった。崋山に長ずること14歳。天保8年に崋山は米庵の肖像を描いた。

江戸期の美術に詳しい鈴木進氏は,「崋山の描いた市河米庵像はみごとな肖像画である。とくにその画稿は，正装姿の記念像にみられない，人間の奥底まで見透すような，鋭い性格描写である」と書いている。[4)]

右ほほの瘤，くぼんだ眼と二重まぶた，少くなった毛髪の髷。崋山の筆はあくまでリアルである。

市河米庵像は鷹見泉石像（国宝）と並び称せられる傑作との評が高い。米庵は自分の肖像の出来栄の見事なのに悦んで厚酬を以て謝そうとしたと伝えられる。[5)]

「心の掟」を記した文政6年に，崋山はまだ掛川藩儒松崎慊堂を知らなか

2）「渡辺崋山」森銑三，前出，p.117
3）「渡辺崋山，スケッチとデッサン」前出，p. 5
4）「渡辺崋山」森銑三，前出，p.230
5）ibid.，p.111

った。崋山が慊堂を知るのは，この2年後（崋山33歳）である。

慊堂は崋山に長ずること22歳。

崋山は慊堂の肖像も描いた。その像稿を見ると，病み上りなのか，月代はそっておらず短い薄い毛がはえている。眉は八の字に下がっている。微笑を含んだ目の目尻にはシワが生じ，わずかに口も開いている。春風の中の好々の老爺という形容がぴったりとする。

画面から緊張感が伝わってくるような佐藤一斉の面貌とは対照的である。崋山は慊堂にも師事した。[6)]

これらの人々は崋山が蛮社の獄に遭った時どのような反応を示したのだろうか。

崋山門下の椿蓼村は，慊堂とならび林家の門下生として学名の轟く佐藤一斉を訪ねて崋山救援を依頼した。一斉は「決獄のうえ，相計り申すべし」と取り合わなかった。20日後，再び訪ねた蓼村に対しても，「全てこの度の一条など口には余り懇意などというべからず。かえって当人の為めに悪し。全て党を結び，かつ人望を厭うは，この節の機先なり」と忠告した。[7)]

同じく崋山門下の松岡台川も一斉を訪うて，崋山の助力を請うた。一斉は，「我等のよく及ぶ所にあらず」と冷淡につき離した。

台川は「一斉先生の学問は何のためか」と憤慨した。[8)]

崋山と親しかった朝日一貫斉は一斉について次のように評している。[9)]

「佐藤一斉は林家の学友なり。程なく公辺（将軍）へ御目見にてもすべし。これは始めは豪傑はだなりしが，今は篤実なり。諸候よりの出入扶持七十人扶持ほどもあるよし。大学一家言はとるに足らず。(略)この人俗気ある人なりときけり」

若い時は豪傑肌を気取り，年をとってからは権門の門を叩く。多くの大名

6）松崎慊堂像画稿は「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.259参照

7）「渡辺崋山」佐藤昌介，前出，p.280

8）「渡辺崋山」森銑三，前出，p.117

9）ibid.，p.118

から扶持を得る。明哲保身の俗物であることが，崋山事件で暴露された。

一斉は自分の属する岩村藩の重役のために「重職心得箇条」を書いており，筆者は安岡正篤の著作集の中で知った。[10]また一斉には「言志四録」なる箴言(しんげん)集も著している。これは川上正光（元東工大学長）注の文庫本がある。筆者はかつて，両書を愛読したことがある。しかし，崋山事件に対する一斉の言動を知ってからは，全く読む気を失った。一斉は一貫斉が予測したように，崋山が自刃した翌月に幕府の儒官に任命されている。世の中には一斉に類した学者は数多い。要注意である。

蛮社の獄は，公儀認定の朱子学を司る林家と開明的蘭学派との対立が，林家二男の特異性格者鳥居耀蔵によって仕組まれ，大疑獄事件にまで発展したものである。林家塾頭の一斉が動きずらかった点は理解できるとしても，同じ林家の重鎮，松崎慊堂の動きとあまりにも対照的であった。

崋山は獄中から「一斉トハ親子ノ如ク御座候筋ニ付，一向ニ頼不申も如何ニ付，程能松岡(田原藩士)へなり御教示可被下候」[11]と書き送っている。(鈴木春山苑，天保10年6月9日)

崋山が一斉の門に入ったのは19歳であった。一斉との間は30年間に及ぶ。この間，壮年に達した崋山には，一斉の俗人ぶりを徐々に感ずるようになったのではあるまいか。この書簡にはその辺の思惑が感じられる。

そういう点から再び崋山筆の肖像画・佐藤一斉像を見ると，下辺から組織のピラミッドを我腕一つで這い上る男に共通の意思の強靱さと，嫉視排擠の念の強さが感じられて仕方がない。

次は市河米庵。崋山が奇禍に罹(あ)った後に，某所で催された書畫会の席上で，米庵は崋山のことをある人から問われた。米庵は嫌疑を畏れて識らぬといった。然らば君の肖像は誰が描いたのかと追求せられ，米庵は痛く窮した話が

10)「新編経世瑣言」安岡正篤，明徳出版社，1988年，pp.157-160

11)「渡辺崋山集第4巻」p.36，「渡辺崋山」石川淳，前出，p.147

三宅友信の撰した「崋山先生略伝」にある。[12)]

そうした話を知って見るわけではないが，華山筆の市河米庵画稿を見ると，米庵の容貌に，筆者は俗臭を感じ，眼に偏執の光を覚える。

崋山の「心の掟」に出てくる１人は安積艮斉（こんさい）である。佐藤一斉の門下で文章を以て鳴らした。[13)]崋山に長ずること２歳。

崋山の知友に讃岐高松藩儒赤井東海がいた。東海は高松藩家老木村黙老に，「奪紅秘事」と題する蛮社の獄の顚末を送っている。

この中で，東海は，「(17，8年前からの知り合いだが)夫より折々出会仕候へ共，立原（杏所），遠藤（勝助）などの懇意に致候様に交りは不仕候。別て近年疎遠にて，年始には往来，手札位に御座候」といい，近年崋山と親交がなかったことを極力強調している。[14)]

「艮斉が大雪行とは申詩，崋山にみせ候ところ，崋山召捕れ候節，右の詩も私の江川（担庵）え贈候西賊歎の詩も，ともども一葛籠之内え入れ，奉行所へ出申候よし。恐るべし。〳〵」[15)]とも書いている。

奉行所の崋山宅家宅捜査で，手稿，写物，等全て押収された中に，自分の詩があったことを知り艮斉も東海も後難を恐れた。[16)]

清水赤城（俊蔵）は崋山の推挙で三宅候の侍儒となった人ではあるが，後累を恐れて崋山救助運動には加わらなかった。赤城の長子太郎（礫洲）は東海に，「登（崋山）へ書物をかし，登（の）吹挙（推挙）にて父俊蔵も三宅（候）へ出申候。甚心配」と語っている。[17)]

「奪紅秘事」には11月17日に艮斉が来て次のような話をしたと記している。[18)]

---

12)「渡辺崋山」森銑三，前出，p.111
13) ibid.，p.115
14) ibid.，p.212
15) ibid.，p.214
16) ibid.，p.214
17) ibid.，p.215
18) ibid.，pp.217-218

「安積祐介来る。相咄候には此節いよ〳〵明白に相成申候。君子小人判然と相成申候。昨日林家え出申候処，もはや何にも気遣なくと御座候間，大雪行の詩は如何と承申候処，詩の事ゆえ罪なしと被答候間，序ながら東海の西賊歎は如何と申候処，是も詩の事にて子細なし。但し別に仮名の書物少しなれども，是も蘭家の説を駁し候趣意なれば，何の子細なし。安心〳〵と林家被申候間，即御安心のため罷越候と申聞候」。

そうして，附註に次のように書いた。[19]

「内実は是日に至り，始て枕を安じ，一盃相傾け申候」

崋山と交った幕府関係の川路，江川といった人々はこの疑獄事件で明らさまに嫌疑がかかり，老中水野忠邦の意向により取調べを受けなかった者だけに崋山救済に動けなかった。

しかし，以上のように学者の多くは，後難を恐れ戦戦恐恐とした有様だった。市河米庵のように崋山を知らぬという者さえ出てきた。

人間としての真価はかかる時でないと分らない。評論家とか学者とかいわれる人々の多くは一斉や米庵と同じであることを銘すべきである。しかし，世の中はそうした人々ばかりではない。

松崎慊堂が崋山の逮捕のことを知ったのは翌日であった。「慊堂日暦」に慊堂は次のように記した。[20]

「渡辺崋山，大草奉行のために逮えらる。(天保10年5月) 14日の事。藤軒来り告げ，愕然たり。けだし諺厄利亜（イギリス）の事をもって誣いられたるなり」

藤軒とは水野忠邦の用人をつとめる小田切要助で慊堂の門人である。

慊堂は当時，佐藤一斉とならんで林家の双璧である。崋山が師鷹見星皐の死によって，佐藤一斉の門に入ったのは文化4年19歳の時。慊堂に師事する

19) ibid., p.218

20)「慊堂日暦(5)」松崎慊堂，山田琢訳注，平凡社，1995年，p.276

ようになったのは13年後の文政8年である。

当時，すでに高令病軀，都塵を避け，郊外の羽根沢に隠栖していた。以下，慊堂の日記によって，彼の崋山救済への動きを見てみよう。

20日には酷暑の中を慊堂の方から藤軒を芝三田の家に訪れ，獄中の崋山の消息を聞いた。[21]28日には，林述斉が崋山の名前を林家門下生名簿の中から刪（けず）ることを命じたと書く。[22]

30日には心痛のあまり，二つの神社のおみくじを引いて強いて安心を求めようとした。[23]

6月1日には，藤軒，佐藤一斉，海野石窓を，また，崋山誣告の首魁鳥居耀蔵まで訪れて終日崋山のため奔走した。慊堂はかねてより林家の二男耀蔵を熟知していたのだ。[24]

7月23日，藤軒が慊堂宅へやって来，崋山の口書を示した。最後に「別而不届」の一句があることを考えると重罪判決が予想された。

残暑が厳しく，数日前より腹をこわしていたが寸時もじっとしておられず，駕を飛ばして友人大蔵謙斉を牛込南御徒町に訪ねた。謙斉は法律に通じていたので意見を聴こうとしたのだ。謙斉は奉行所の口上の成った以上は奈何ともし難いとの返事だった。[25]

前日食した鰹のなますに食中毒となり，激しい霍乱（かくらん）と嘔下を起したが，藤軒を通して，水野越前守に崋山助命の嘆願書を上書しようと決意する。[26]

7月27日の夜中に筆をとり，明け方に至って脱稿した。28日，終日推敲，夜に至って浄書にかかったが，困臥（こんが）。病中の上，徹夜した疲れが一挙に出たのだ。29日に浄書を完成し，藤軒の所まで持参せしめた。[27]

---

21) ibid., p.277
22) ibid., p.278
23) ibid., p.282
24)「渡辺崋山」森銑三，前出，p.16
25)「慊堂日暦(5)」前出，p.291
26) ibid., pp.291-292
27) ibid., pp.291-292

上書は巻紙に細字，長さ一丈に及んだ。

崋山の清廉潔白，老母への孝節，主家への忠節，家老としての功績を述べた後，政道に対する批判が果して罪過たるべきか否かの根本問題を唐律，明律を引用して無罪を主張した。[28)]

「況や登が誹謗いまだ反古中に認めたるのみにて，曽て外に露(あらは)したるにも無之，屋捜をして，反古取出，吟味仕らんには，誰かは罪人ならざらんと，此間中逢人の内皆ひそ〳〵と申事に御座候」と切言し，「此処など考合せられ，大は天下有識の心ヲ汲取らせられ，小は登母子慈孝之私を御憐憫被遊，相公之御仁政至らぬくまもなく天下感悦奉候様，奉願候事に御座候」[29)]

当時，罪人を弁護すること，しかも老中に直接に上書することなど命懸のことだった。

助命運動の中心だった椿椿山が獄中の崋山にあてた密書の中に，「既差出候節は熱鉄を呑候如くと申事之由承及候」の一句がある。

慊堂は，熱鉄を呑むが気持で嘆願書を老中に提出した。[30)]

大事を果した慊堂は気がゆるんで臥床。藤軒から何もいって来ぬので，8月5日雨の中を藤軒を訪れ，水野が上書を冒頭より末尾まで読み，「老人はいこう心労している」と洩したことを知る。[31)]

慊堂は自分の仕えている掛川藩候で，時の老中太田備後守資始(すけとも)にも見(まみ)えて哀情を訴えた。[32)]

12月18日判決。家宅捜査で没収された華山の草稿の中に不謹慎な言辞があったとされ，有罪となった。死を覚悟していた崋山に罪一等を減ぜられ，判決は「…右始末重役を相勤め候身分，別而不届に付，主人家来へ引渡，於在

28)「渡辺崋山」森銑三，前出，p.17
29) ibid.，pp.17-18，「渡辺崋山」石川淳，前出，pp.150-151
30)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.152-153
31)「慊堂日暦(5)」前出，p.295
32)「渡辺崋山」森銑三，前出，p.18

所蟄居」[33]であった。慊堂の上書が水野越前守を動かしたものと見るべきであった。

翌天保11年，慊堂は古稀を迎えた。

正月13日，崋山が江戸を立つと聞き，家人を田原藩邸に遣り，崋山の動静を問わせる。崋山は門下の金子健四郎（剣を斉藤弥九郎に学び，剣客として有名）に書を慊堂宛持参せしめた。

「私義旧年不料遭奇禍，座九死一生之地候而，最早出獄は仕間敷と覚悟仕候程之処，先生師弟知己之御情義，不可已之故を以，御身を抛，御救助被下置候義，君父之恩と雖不過之，唯々涙縦横のみ罷在候」と書き，「先生御壮健には被為入候得共，追々御高年に被為成，此度不拝謁義遺憾断腸仕候」[34]とした。

署名は末弟子某とのみ記した。罪人として名を憚ったのである。

慊堂は崋山に返事を認めた。その最後には，「老拙本年七十，去秋以来は別(わ)けて衰弱を覚え候。(略)右の通故，長きところ五年十年の内に過ぎず。実に風燭の人，明日も覚つかなく候へば，最早拝唔も相叶はざらんと，紙に臨んで茫然，御察し下さるべく候」[35]

天保12年10月11日，在所田原において崋山自刃。年49。

慊堂が崋山の死を知ったのは10月26日。翌27日，鈴木春山が訪れてきて，詳報を伝えた。慊堂日記には次のように記す。

「陰，雨，三宅候の医者鈴木春山来りて，崋山の自尽を報ず。崋山は杞憂を以て罪にかかり，また杞憂を以て死す。悲哉」[36]

---

33)「渡辺崋山」石川淳，前出，p.153

34)「渡辺崋山集第4巻」pp.65-66

35)「渡辺崋山」森銑三，前出，pp.20-21

36)「慊堂日暦(6)」松崎慊堂，山田琢訳注，平凡社，1996年，p.165

(八)　おわりに

崋山は無実の罪で告発せられ，家宅捜査で篋底(きょうてい)に収めてあった各種草稿(「西洋事情」や「慎機論」)が没収された。

これらの草稿は，やや過激な表現があり，発表せずにいたものである。しかし，町奉行所の判決は，お上に対し不隠当な言辞があるとして，「在所田原にて蟄居」と崋山に命じた。

田原での師の家族の困窮ぶりを同情した門人が高名の画家崋山の絵を売って救助しようとした。

これが蟄居中の身の者として不謹慎として問題となった。主君に累が及ぶことを恐れた崋山は自刃する。

自刃前日，入獄中の崋山救出運動に奔走してくれた門下生の椿椿山に次のような書信を送った。(天保12年10月10日付)

「然ル上ハ主人安危にもかかハり候間，今晩自殺仕候。右私御政事をも批評致ながら，不慎の義と申所落可申候。(略)定テ天下　物笑ひ悪評も鼎沸可仕，尊兄厚御交リニ候とも，先々御忍可被下候。数年之後一変も仕候ハヾ，可悲人も可有之や。極秘永訣如此候」[1)]

崋山の最後の言葉は,「数年後に,内外情勢が一変するようなことがあれば,私の死を悲しむ人もあるだろうか」であった。

崋山自刃の翌年，幕府は異国船打払令をやめ，薪水食料の給与を許した。阿片戦争に敗れた清国が屈辱的な南京条約を英国と結んだのはこの年である。幕府が米，英，露と和親条約を結んで開国するのは崋山自刃13年目の安政元年であった。

田原藩の同志鈴木春山は，崋山自刃の翌年，「地球の形勢は尽(ことごとく)，崋山議の通ニ相成，何共落涙の至に候」と書いている。[2)]

---

1)「渡辺崋山集第4巻」p.233

2) ibid.,　pp.234